Osaka University Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞ アントニオ・チミノ著 『現象学と遂行事実的生に関するハイデガーの遂行的哲学』 Antonio Cimino : Phänomenologie und Vollzug, Heideggers performative Philosophie des faktischen Lebens, Vittorio Klostermann, 2013.
Author(s)	西村, 知紘
Citation	メタフュシカ. 2014, 45, p. 155-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51534
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

《文献紹介》

アントニオ・チミノ著

『現象学と遂行　事実的生に関するハイデガーの遂行的哲学』

Antonio Cimino: *Phänomenologie und Vollzug, Heideggers performative Philosophie des faktischen Lebens*, Vittorio Klostermann, 2013.

西村知紘

本書の最も注目に値する特徴は、ハイデガーが主著『存在と時間』を公刊する以前にフライブルク大学において行っていた講義、すなわちハイデガーの講義録の中でも難解な、いわゆる初期フライブルク講義を真正面から論じている著書である点にある。とりわけ全集版での初期フライブルク講義録の刊行以降、多くのハイデガー研究者の注目を集めてきた「形式的告示（formale Anzeige）」という方法論にも一章が当てられ、綿密な解釈がなされている点も重要である。

初期フライブルク講義の理解を困難にしている要因は幾つか考えられるが、なによりも主題とする問題が多岐にわたることにある。そこで述べられている内容に共通点を見出すことは難しく、しかもそれぞれの講義の全体の文脈にすべて合致するような明確な解釈を与えることはさらに困難である。それゆえに初期フライブルク講義や形式的告示を取り扱った研究は論文など比較的短いものが多く、幾つかの概念については説明ができているものの全体的文脈にまで注意が及んでいるものは少ない。そのなかで本書は、形式的告示を始め、解釈学的直観、現象学的破壊など初期フライブルク講義の主要な概念をほぼ網羅的に取扱い、それらを「遂行性」という統一的な視点から形式的告示と関連させて解釈することに成功しているという点において他に類を見ない研究である。

概要

本書は序論と次の三つの章から成る。

第一章　遂行性　導入的概論

第二章　解釈学的直観　事実的生の遂行的現象学

第三章　形式的告示による現象学的概念形成　遂行的概念としての現象学的被説明項

表題から分かるように、第一章は遂行性についての導入であり、第二章と第三章はそれぞれ解釈学的直観と形式的告示という二つのハイデガーの概念の解釈によって構成されている。

序論では本書の方針が述べられるが、確認しておかなければならないのは、本書は「遂行的なものを純粋にハイデガー的に読み解くことを目指したものでも、ハイデガー的な思惟を遂行的なものへと一面的に還元することを目指したものでもない」（S.21）という点である。つまりチミノの強調する遂行性が初期フライブルク講義におけるハイデガーの真意を言い当てているというわけではない。遂行性（Performativität）という言葉自体、ハイデガーの言葉ではなく、チミノが自ら選びだしたものであり、ハイデガー自身は遂行（Vollzug）を用いている[1]。本書はハイデガーに限らず哲学全体を視野に入れている。つまりチミノのみるところ、遂行性とは哲学にとって重要な問題の一つであり、哲学の営み自体を特徴づけるものである。そしてこの哲学における遂行性をとりわけ取り出そうとしているものこそ、ハイデガーの初期フライブルク期の講義なのであり、本書はハイデガー解釈を通してこの遂行性を際立たせることで、ハイデガーのみならず、他の哲学的研究にとっても生産的な成果をもたらすことを目指している。

それゆえ第一章では、まずプラトン、アリストテレス、カント、ヘーゲルの哲学について、それらがどれも遂行性を重視していたということが確認される。カントにおいて、「哲学ではなく、哲学すること（Philosophieren）のみを学びうる」（S.33）ことが述べられているように、あるいはアリストテレスにおいて、「徳の遂行に準拠していない倫理的ロゴスは単なる無益な理論であることが明らかになる」（S.41）ように、哲学が問題として扱うのは単なる知の内実、すなわち「何か（Was）」ではない。重要なのは「哲学すること」、ないしは哲学的な生の形式（Lebensform）がどのように遂行されるかという「いかに（Wie）」である。そしてさらに重要なことは、哲学的生の形式が自らによって実際に遂行されることであり、したがってチミノは以下のように定式化する。すなわち、「最終的には、哲学の本質は、一人称のパースペクティヴ（Erste-Person-Perspektive）において事象そのものへの哲学するふるまいを遂行することにある」（S.44）。

第二章からは、初期フライブルク講義の厳密な解釈が始められ、第二章ではハイデガーの解釈学的現象学で中心的機能を果たす二つの要素のうち、解釈学的直観が取り扱われる。

本格的な解釈に先立って、ハイデガーの解釈学的直観と形式的告示的概念形成がいかなる歴史的状況において生じたのかが説明される。チミノによれば、19 世紀から 20 世紀への移行の時代の哲学において問題となったのは、哲学とそれ以外の学との関係をその方法と研究の対象領域に関して新たに規定しなおすという、「メタ哲学的な問い」であった（S.100）。フッサールによって創始された現象学もまた、この問いに答えようとする時代の流れの中から生じてきたものである。そしてハイデガーは、フッサールの弟子として現象学の動向に与していたが、フッサールの

---

[1] 本稿で「遂行性」「遂行的（遂行的なもの）」と訳語を当てたのはチミノの術語としての Performativität と performativ（das Performative）である。それ以外の「遂行」を含む訳語はすべて Vollzug ないしそれに由来する語の訳語である。

現象学への態度には不満を持っていた。なぜならフッサールの現象学は当時の数学的自然科学の体系をモデルとしているが、ハイデガーが目指したのはより根源的な事実的生の前理論的ないしは非理論的な領域だからである。フッサールの現象学は、理論的な方法によって考察する限りその領域に達することができないとハイデガーは考えている。

他方でハイデガーはフッサールの現象学のうちに哲学にとって決定的に重要な点も見て取っている。それは、「事象そのものへ」という現象学の格率である。ハイデガーからすれば、フッサールはこの格率を掲げてはいるが、フッサールの方法では「事象そのものへ」と達することができない。そしてチミノによれば、まさに解釈学的直観と形式的告示的概念形成が、哲学の新たな規定という問いに対する「フッサール的回答の徹底した、そしてまた必然的なラディカル化のための決定的な出発点」（S.101）なのである。したがって第二章ではまずこの二つの柱のうちの一つである解釈学的直観の解明がなされることになる。

フッサールの現象学のどこに問題があるかについては、チミノが用いる現象学の二つのモデルによって非常にわかりやすく説明されている。二つのモデルのうち一つは現象学の「理論的モデル」であり、もう一つは現象学の「遂行的モデル」である。前者はフッサールの現象学、後者はハイデガーの解釈学的現象学を示している。筆者の見るところでは、この理論的モデルと遂行的モデルの理解が本書において最も重要である。というのも第二章のチミノの主張はすべてここに集約されていると言え、第三章で取り扱われる形式的告示もまた、遂行的モデルにおける解釈学的直観を言語的表現にもたらすための方法として考えられるからである。

二つのモデルは初期フライブルク講義において一貫して用いられている、内実意味（Gehaltssinn）、関連意味（Bezugssinn）、遂行意味（Vollzugssinn）という現象の三つの意味方向によって説明されている。しかし、この意味連関についてのハイデガーの説明は分かりやすいとは言えないうえに、後半には時熟意味（Zeitigungssinn）というもう一つの意味が生じてくるなど、その関係は複雑で理解が困難ある。意味連関に関するチミノの解釈は、本書の遂行性に基づくハイデガー理解と整合的であるだけでなく、この複雑な意味連関を明快に説明しているため、二つのモデルの検討に入る前にこの点についても触れておくべきであろう。

まず本書でのチミノの参照に従って、三つの意味についてハイデガーによって簡潔にまとめられた部分を引用しておこう。

1. 現象において経験される根源的な「何（Was）」（内実）
2. 現象がそこで経験されるところの根源的な「いかに（Wie）」（関連）
3. 関連意味がそこで遂行されるところの根源的な「いかに（Wie）」（遂行）

この三つの意味方向（内実意味、関連意味、遂行意味）はしかし、単に並び立っているのではない。「現象」はこの三つの方向に従った意味全体性である。

（Heidegger, Gesamtausgabe Band 60, Vittorio Klostermann, 1995, S.63）

三つの意味はそれぞれ独立した特徴を示しているのではなく、内実のみが Was に対応し、関連、

遂行の二つはともに Wie に対応するという構造をとっている。このことには誰でも簡単に気づくであろうが、なぜこのようなアンバランスな形になっているのか説明することは意外にも難しい。というのもハイデガーがこのうち内実への定位を問題視し、遂行への定位を重要視していることは、ハイデガーの記述から容易に読み取れるのに対し、関連の位置づけは Wie という遂行との共通点から肯定的かというと、そうとも言えない記述もあり、判別が難しい。

そこでチミノの解釈に従って、ハイデガーの初期フライブルク講義がフッサールの現象学をラディカル化したものであると考えると、この構図のアンバランスさの意味するものが明らかになる。チミノもまた遂行意味と関連意味の関係に目をつけることから考察を始めている。彼の解釈では、内実意味とは「ノエマ的（noematisch）」であるのに対し、関連意味と遂行意味はともに「ノエシス的（noetisch）」である。それゆえ、「遂行意味と関連意味はノエシス的意味構造の並立した構成要素ではなく、「むしろそれらは互いのうちへと統合しあっている観点である」（S.119）。そして遂行意味は、関連意味においても示される志向的な関係の「時間的－歴史的性格」を表したものであるとチミノは解釈する。すなわち、関連意味はフッサールによって指摘された対象への志向的関連に由来するものであり、遂行意味はそれをハイデガー的な視点によって展開させたものなのである。三つの意味連関のアンバランスさは先に述べたハイデガーのフッサール現象学に対する二重の態度を反映したものだということができるだろう。

次に現象学の二つのモデルの検討に入ろう。フッサールの現象学を意図した理論的モデルに関してチミノは主に二つの問題を指摘している。第一にこのモデルでは、現象としての体験は「眼前にある物」としてとらえられ、その場合「遂行意味の特別な遂行的ダイナミズムが損なわれる」（S.124）。つまり現象に反省的態度で向かうという構図では、「現象学的直観がその遂行に際して現象に関係するとき、現象が直観の相関物となるように関係づけられるために、その現象は現象学的直観の内実意味として示される」（S.123）。したがって理論的モデルの現象学的直観では、現象の内実意味が際立つことになる。

ここで問題を一層複雑にしており、チミノが鮮やかに解明している点は、フッサール的な理論的モデルにおける現象学では、内実意味が表立ってとらえられているとはいえ、関連意味や遂行意味が完全に無視されているわけではない、ということである。フッサールの現象学の重要概念のひとつである志向性は、ハイデガーの意味連関でいうところの関連意味にあたることからわかるように、フッサールの現象学もまた現象の関連に目を向けている。しかし、すでに述べたように理論的方法では対象の内実意味に定位した態度をとっているために、関連意味と遂行意味は着目されたとしても、この内実意味への偏向によってゆがめられてしまう。ここに理論的モデルの問題がある。関連意味や遂行意味が無視されたり、歪曲されたりすれば、「現象そのものへ」向かうことが妨げられることになる。逆に言えば、それゆえにハイデガーは遂行意味の優位を強調するのであり、チミノがこの点を遂行性として際立たせて取り出している理由でもある。

理論的モデルの第二の問題は、「理論的態度の現象的性格が絶対化され、あらゆる種類の体験の分析に対してひな型（Muster）として機能することにより、事実確認的ふるまい（das konstatierende Sich-Verhalten）が自己投影への傾向を示す」（S.124）という点にある。序論で示されているように、

チミノの解釈ではハイデガーの解釈学的現象学において要となる遂行性は体験を追遂行することによって確保されるが、現象学者が自らの立場を絶対化し、対象から距離をとった態度をとるとしたら、現象の関連意味と遂行意味を、遂行性に即して理解することは不可能である。

これに対してハイデガーの解釈学的現象学をチミノは遂行的モデルによって説明する。遂行的モデルの特徴は、「主題的遂行性は解釈学的・理解的直観（「同行」、「生の共感」）としての現象学的直観に帰属している方法的遂行性によってのみ際立たせられうる」（S.126）というチミノのテーゼに集約されていると言える。この「同行（Mitgehen）」というのがハイデガーにおける解釈学的直観を理解するうえでのキーワードである。同行とは高次の反省によって対象を離れた位置から眺めるのではなく、いわば対象に付き添うような形で現象学者自身が遂行的な態度をとることを意味する。そうすることで理論的モデルのように現象全体が内実意味優位の対象とされてしまうことは無く、関連－遂行意味を含めた三つの意味方向が全体としてあるがままに現れ、すなわち「事象そのもの」により近い形で現象に接近することが可能になる。したがって、解釈学的直観を示した遂行的モデルでは内実意味への定位と関連－遂行意味への無関心という理論的モデルの第一の欠点は回避されている。またこの同行は「理解的（verstehend）」同行として遂行される。理論的モデルの場合、現象学者が絶対的な立場から対象を規定するという構図を取るため、現象学者が現象に対して規定的位置に立つことになる。しかし繰り返すが、「事象そのものへ」という現象学の格率に示されるとおり、重点は現象の側にある。遂行的モデルにおいては、むしろ現象学者はさまざまな現象の意味連関のうちへと「身を置き入れる（sich versetzen）」という態度をとり、事実的生の現象をその現象に即した形で自ら遂行してみることによって、現象を理解することが重要なのである。現象を理解するとは、規定することではなく、「生の共感（Lebenssympathie）」というハイデガーの言葉に表れているように、自己自身のものとして感じとることである。ここでは理論的モデルの第二の欠点である現象学者の立場の絶対化は生じ得ない。ハイデガーが現象学的直観を解釈学的直観と言い換えたのは、このように理解しつつ、理解にもとづいて現象を表現するという解釈学的方法によってのみ、現象への接近が可能だと考えたからである。「表現」という観点に関しては第三章で述べられる形式的告示的概念形成と密接に結びついている。

以上のようにハイデガーの初期フライブルク講義の試みは、フッサールの現象学が抱える問題点を、現象学の格率に即して改良したものであり、その改良において中心的役割を担っているのが遂行性である。これが本書におけるチミノの解釈の一貫した主張である。

第三章では解釈学的直観と並ぶ、初期フライブルク講義のもう一つの柱である「形式的告示的概念形成」の解釈がなされる。とはいえチミノが幾度も強調するように、解釈学的直観と形式的告示的概念形成は互いに関連しあっている。というのも、形式的告示とは解釈学的直観を言語にもたらすものに他ならないからである。したがってチミノの解釈では、形式的告示もまた遂行性との関連から説明される。

ハイデガーは形式的告示に予示的（vorzeichnend）機能と禁止的（prohibitiv）機能という二つの機能を認める。まず予示的機能とは形式的告示が指し示すものは、暫定的（vorläufig）なもの

だということを意味する。これは欠陥ではなく、そこでの予示は「絶えず改訂に開かれている」（S.203）ことを意味する。すなわち、規定を行う者の立場が絶対化されることがなく、読み手や聞き手が形式的に告示されたものを自らの立場、つまり一人称のパースペクティヴによって実際に遂行し、それを自らの視点から改訂することができるということを意味する。

二つ目の禁止的機能とは「事象そのものへの自由な接近を妨げうる先入見を含んだ予断を警告する」（ibid.）ことである。ここで「先入見を含んだ予断」とされているのは具体的には理論的態度のことである。チミノの解釈を理解するうえで重要となるのが、チミノが幾つかの箇所で言及している主題と方法の共属性のテーゼである。このテーゼを簡単に要約するならば、「遂行的なものを主題化するためには、その方法もまた遂行的でなければならない」ということができよう。すでに遂行意味がフッサール的な志向的関連をハイデガーの視点から展開させたものであることに触れたが、チミノは「時間的－歴史的性格」に遂行意味の独自性を見て取っている。この点に関するチミノの記述は明確とはいえないが、以下のように捉えてよいだろう。ハイデガーの解釈学的現象学は、事実的生を対象とする限り、生が生を解釈するという自己関係的な性格を持つ。それどころか、自己自身に関して何らかの理解をもっていることは事実的生の本質であって、チミノがハイデガーにおける歴史性で強調するのはこうした「生が自己自身に慣れ親しんでいること」（S.198）である。すなわち、遂行性は、自己解釈に関するものである限り、自らが体験を追遂行するという遂行的方法をもってしか主題化されえないのである。逆に理論的態度を取る場合には、現象の遂行的なものに接近することはできない。形式的告示の禁止的機能はそれゆえに遂行的でない態度を禁止するのである。

哲学によって示されるものは、たんにそれが何であるかを示すだけでなく、それがいかにして接近可能になるのかをも示さねばならない。形式的告示はチミノによって以下のように解釈される。

> この告示的性格が関わっているのは、定義されるべき対象が直接に規定されたり、主題化されたりすることではなく、理解する際に追跡せねばならない意味方向のみが、対象をその具体化において我が物とするために告示されるということである。
>
> （S.219）

すなわち形式的告示は当の対象を直接的に主題化することはなく、そこにひとつの段階を用意する。つまり対象の形式性のみを告示することによって、読み手ないし聞き手が対象としての体験を追遂行するように促すのである。自ら遂行することによって、方法的な遂行性が満たされ、対象への本来的な接近が可能になる。

問題点

しかしながら、本書では十分に説明されていない問題も幾つかある。とはいえこれらはチミノの解釈の欠陥と言うよりも、初期フライブルク講義の抱える問題点が、チミノの解釈によってよ

り目立った形で明らかにされたとでも言うべきものである。ひとつ挙げるとすれば、形式的告示に従うことが出来る者とそうでない者の区別の問題がある。形式的告示は対象を完全に規定してしまわない。規定してしまわないからこそ、読者自らの遂行が促されるのであるが、実際にそれを自らの問題として受け取ることができるか否かはどのように決まるのであろうか。チミノの解釈では素質の問題であると考えているようにも見受けられる。たとえばプラトンを解釈した部分で、チミノは「哲学的会話の成果は大部分において参加者が実際に「自由な人間」であるか否かに依存している」（S.37）と述べている。それでは「自由な人間」であるためにはどうしたらよいのであろうか。それは哲学が教えることが出来ることなのであろうか。チミノ自身は後の箇所で、『存在と時間』における「顧慮（Fürsorge）」の二つの極端な場合のうちの、「率先して相手を解放する顧慮」に、哲学の教授の可能性を見て取っているようだが、初期フライブルク講義から取り出してきた遂行性の概念と、『存在と時間』の概念がうまく齟齬無く結びつくのかどうかは検討の必要があるように思われる。

（にしむらちひろ　現代思想文化学・博士後期課程）